

天易真兮 久々の個展

じや りふか

夏の頃 久々に開かれた彼の個展に行った。

個展とか言ったって、大したことはない。会場は、庭にある草庵であった。

躡り口から腰を屈めて入れば、藁すきの露わに剥き出た荒壁仕上げの土壁に囲まれた一畳の茶室は、柿葺きの屋根の造る深い廂の陰翳と静寂、一人ずつ入って、李朝の庶民が使った何の価値もない平凡な雑器を眺め、彼が吹くブルース・ハープを四十四秒聴き、帰るだけである。二人以上が来た場合は茅葺の小さな待合で待った。

白い洗いざらしのシャツに、膝の破れた十六オンスのデニムのスキニーを穿き、それでもいつもの折れ皺れたワイザード・ハットをかぶっている、長髪と長鬚が腰まで蔽う天易真兮、二十五歳。

無職の平衛隆臥は旋律もリズムもない、金属音のコーラージュのような即物的なハープを聴き、また躡り口から出でて家に帰って寝た。

平成二十九年二月十二日記す